展 景

季 刊

No.86

Summer 2017

季刊　展景 86号

目次

屋形船〈短歌〉……市川茂子　4
あと数日で四月〈短歌〉……小野澤繁雄　6
桜―2017―〈短歌〉……河村郁子　8
春〈俳句〉……谷垣満壽子　10
春の旅〈俳句〉……新野祐子　12
キリバス〈短歌〉……布宮慈子　14
黒揚羽蝶〈短歌〉……丸山弘子　16
蒼穹を背に〈短歌〉……結城　文　18
東京歌会（第五十二～五十四回）……20
〈那須通信 31〉水やり……加藤文子　26
〈薫風颯々 6〉(新)6787……神村ふじを　30
ふるさと……河内愛子　34
対詠　ごきげんいかが？　PART 62……小野澤／布宮／河村　46
前号作品短評A……50
前号作品短評B……52
エッセイ教室「清紫会」の作品より
みていないこと……小野澤繁雄　54
落書き……松井淑子　56
鮪ののり巻……市川茂子　58
「清紫会」だより……60
無二の会短信……61
編集後記……66

今号のイメージ／アスパラガス

屋形船

市川茂子

ホテルより真向いに見る箱根山一夜に降りし雪の花咲く

窓近く大島桜の咲きいるを夕べの雪は花房被う

目覚むれば飲食のこと先ず思う斯くなるものか老いのなりわい

愛着の残る品じな片付けてしばし空しく思い出さぐる

悲しみのあるやに聞こゆる猫のこえ春雨しげき夕べの庭に

この季（とき）を待ち居しばかり花ばなの自ずから咲き華やぐ四月

とぎれなく咲く花の色かたち個性をさらし風に吹かるる

雑草の生え出るままに見過ごせば小花が咲きて抜くをためらう

屋形船のガイドに左右の花眺めスカイツリーを見つつ昼餉す

橋いくつくぐりて巡る屋形船　隅田川辺の桜盛りに

あと数日で四月

小野澤繁雄

まっすぐは犬にはないかくり返し離れもどるもそのよろこびに
足早に園突っ切ってくる一人中学生は近道をして
花付きの長くもあるかなそこにしも鳥がきている棟前の梅
一周が五百メートルの園路なれスタートとあるをいくたびか踏む

注意書きは手すりなきこと下沼に浮橋渡る足もと寒く
選手十人に女子マネ三人の不来方（こずかた）（岩手）センバツに出る
アパートのヴィーナスBは塗装中あと数日で四月この日々
交差点の表示地名の東方読み「ひがしかた」に少し驚く
若き頃コリアン？と聞かれ聞かれしが立川なれば緊張もなく
立ちよりしばかりに図書館の脇の桜は今日より咲いて枝先の花

桜 ―2017―

河村郁子

東京の開花宣言いち早し桜の五輪雨に冷えゐる

満開の予報は四月二日にて寒のもどりの風に叩かる

彼岸明けの染井吉野の蕾みなうすくれなゐの差しそむるなり

薬師堂の橋渡りつつ見る蕾なべて弾けんばかりにふくらむ

ふくらみし蕾にかそか萌黄いろ開花の刻の備へばんぜん

花まつりに満と開きし櫻花風雨に耐へこし勢ひ放てり

あずさ号の窓より眺むる谷あひの村に桜と鯉のぼり顕つ

二分咲きの神代桜のかなたには甲斐駒ケ岳の凛と聳える

残雪の甲斐駒ケ岳を見つめつつかの日の山の友らを偲ぶ

三日後に神代桜は満開の知らせに威容を心に描く

春

谷垣滿壽子

懐かしむ土筆一本摘みし畦

蝶生まるまだ影もたぬ淡さかな

遺されて今年も仰ぐ櫻かな

櫻並木ゆつくり抜ける路線バス

はればれとせぬ日続きて花曇

朝七時ブラウニング*の春は今

*ロバート・ブラウニングはイギリスの詩人（一八一二～八九）

春昼や眠たげにある椅子二つ

花の雨遺品少なく棲むと決め

つぎつぎと街の灯消えて春の闇

生きるとは日々の勝負か飛花落花

春の旅

新野(にいの)祐子

流氷や炯々(けいけい)と星散らばりぬ

迷い子の黄鶲(きびたき)を抱く霞かな

耕(たがやし)や土竜はよき字よき響き

たましいの零れぬようにゆく春野

永き日や猫腹見せて吾を迎う

ハチクマよ一万キロの春の旅

お地蔵の髪伸びてくる穀雨かな

淡々と記す日常荷風の忌

月暈(つきがさ)の地に降りしごと葱坊主

ネグロスの汐風まろし鶏合(とりあわせ)

キリバス

布宮慈子（やすこ）

浅黒き肌（はだへ）をもてりキリバスの名誉領事のケンタロ・オノ氏

仙台より高速バスで来し人を驚かしたる山形の雪

みんなみの赤道直下に浮かぶ島キリバス共和国の海が映さる

なめらかな日本語なればキリバス人ケンタロ・オノ氏は仙台生まれ

八割が沈むかもしれぬキリバスの浸食されゆく幹線道路

過去形で話さるること多くして南の島も安穏ならず

親しみし池澤夏樹のものがたり南の島が溶けゆくごとし

キリバスの若者に人気のあるといふ鰹の一本釣りの学校

われら買ふ鰹のたたきはキリバスの若きが釣つた鰹かもしれぬ

キリバスの十万の民いかに生きむ長表（ながおもて）公民館にわれら思ふも

黒揚羽蝶

丸山弘子

植樹され三叉路に咲くさくらにて「プリンセス雅」花の色濃し

駅向ふに住む母親を呼びよせてさくら見物といふ若き夫婦は

友の待つ吉祥寺までのバスにして開発すくなき古き町ゆく

あたたかき啓蟄の日よすずめらに残しおきたる飯をまきやる

パン屑を撒くを待ちゐる鵯（ひよどり）の番（つがひ）か今朝は二羽で来てをり

はやばやと黒揚羽きて花色の濃きおほむらさきの花にまつはる

色を忌み黒揚羽蝶の去るまでを寿の文字書きたるとふ亡母（はは）

畳おもてのスリッパ足裏（あうら）にやさしくてすすめくれたる嫗をおもふ

右足のむくむを言ひてソックスのゴム跡しるきを弟は見す

戸締りの前のひととき中空の清明の夜の上弦の月

蒼穹を背に

結城　文

踏み入らむとするものありて守りたきものを意識す窓をうつ風

こはごはと然れどもゆづるまじき異説首たてて歩む道のサルビア

蒼穹を背に坂道をくだりくる少年すがしき風とともに来

とどくとは思はねど祈るほかはなく直ぐたつ杉の上の青空

山頂より見おろす海に沿ふ街のなべては夕映えの輝きのなか

碧海のかなたの一点目指しゆく船が曳きゆく一筋の水脈

夏至近き海に沈む日蕩たうとトルコ絨毯のごとき夕焼け

山道を歩ききたりしたかぶりをしづめむと山の落ち水ふふむ

雪解水流れくだれる「三分一（さぶいち）の湧水」にうちし蕎麦をいただく

平凡といふ強さもて無限回うちかへしゐる磯波の音

東京歌会（第五十二回）

平成二十九年二月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十二首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、松井淑子、丸山弘子）。

お迎へが来るまで元気でゐませうと母を励ます整形外科医　布宮慈子

お迎へ、でそんな年齢でもあるのか。云ってくれる、というか失礼（無神経）なようにも響くが、整形外科医なのでやや間接か。医師と母、介護者であるような作者と登場するのは三人。ありそうなやりとり、よくわかる（歌）ということになった。

草を刈るひとと目があひほゝ笑めり土手に二人と川にせきれい　中川禮子

目があひ、だから草を刈るひとは一人。土手に二人、とある二人にはじぶん（作者）が含まれると読む。が、草を刈るひとが二人とならないか、二人を外すことにしたら、と。三句、ほゝ笑めり、で女性の作者としれる。歌はやや複雑だが、面白さがある。

「ま(ん)ず咲く」から来ているというマンサクの花のたよりがそこにきている　小野澤繁雄

マンサクはしらないという人、しっている人で半々。上句（東北弁）も含めて、面白い。早春の花には黄色が多いが、これも黄色（シナマンサク）。

夫の一周忌むかへる友の体重の戻りしを聞き共によろこぶ　丸山弘子

よろこぶ、に少し異論あり。肯定感がでていればいいので、笑まいぬ、でどうか。長い看病かその後の嘆きかで体重をおとしてしまったのだろうか。

別名はかがり火花のシクラメン去年よりいまだ咲きつぎており　市川茂子

かがり火花（ひばな）、と読むという。別名は、なるほどというところ。去年（こぞ）よりいまだ、からシクラメンの水遣りのむつかしさが話題になった。歌はこの通りとも。

トランプ氏の映像消してこの年も穏やかなれと禱れるわれは　大石久美

トランプ氏の大統領就任式は二月二十日だったが、映像は連日。波乱や大きな変化が予想される情況下、作者の禱り（の思い）は、共有できる。われはまた高齢で、不具合を抱えてもいる。

東京歌会（第五十三回）

三月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階Ａ会議室。詠草は各二首十二首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子）。

撫で仏なでいるままに手の多くおとめの手にも触れているかな　小野澤繁雄

撫で仏は、パワースポットになっているようなところ、女子にはとくに人気ともいう。面白い歌になった。三句、手の多く、の位置はうごくかもしれない、と。

梅の木に小鳥来てをりそれの名を知りたきものを止まりてくれよ　中川禮子

普通、梅の木とのとりあわせでは鶯だが、この小鳥は、メジロだろう、と。首をつっこんで花芯の蜜を吸う。つれだってくる。視野の中にいる小鳥に、止まりてくれよ、は、名のみか、一種関わりをもとめている気持ちがある。

コピペして作つた住所録なればどこでどうして間違へしか謎　布宮慈子

コピペはコピーペースト。当人たちに確認済みのもの、をコピペしてつくったものなのに。あるいは、メールなどで受けとった住所をそのままペーストしてつくったものなのに。キチンとかたちにしている。

ＵＦＯか恐竜の卵かドーム球場粲粲と春なり翔びたつるべし　林　博子

都市の景観としてもドーム球場はいかにも異観。卵が孵化するイメージは、また春の歌になっている。遊んでいる。

おしゃれして出で来し彼女自転車を預けて駅へその先問わず　市川茂子

自転車を預かるほどの近しさ。彼女と対になるいいかたは彼。おしゃれして、がいい。おおよそ遠慮して聞くことはしなかった。その間柄もしれる。結句はやや硬く、その先聞かず、くらいでいい、と。

あたたかき啓蟄の日よ雀らに残しおきたる飯を蒔きやる　丸山弘子

飯は、いいと読みたい。啓蟄を待っていた気分もある。その日はあたたかい日になった。雀らとのやりとりにもあるのは生活のかたち。なだらかに詠まれた。

東京歌会（第五十四回）

四月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階C会議室。詠草は各二首十二首。出席者五名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。

水の面の花びらをみるもよしというこれは南さん東京の桜　小野澤繁雄

水の面（も）の。南さんは土日の朝のＮＨＫお天気キャスターで、独特の味がある。東京では大体花が終わっていて、したがって地域限定のコメントになる。花筏というコトバがある。

なんとまあ自信過剰の男なり　ドナルド・キーンの『石川啄木』　布宮慈子

この評伝は、昨年（啄木生誕一三〇年）に刊行されたもの。席上読んだ人はいなかったが、作者は読んで、そこからの感想が上句になった。キーンさんは、啄木を、ともだちにはなれないが面白い人と云っている。女性の眼ということもある。

配付され三叉路に咲く一本の「プリンセス雅」花の色濃し　丸山弘子

プリンセス雅（みやび）はみなしらないという。配付され、が何か説明されていない感じ。町内会で配ったもの。プリンセス雅、は皇太子妃雅子さまの成婚記念の平成五年に新種登録された桜で、花色は、歌の通りに濃いようだ。桜だとわかったほうがいいということになった。ちなみにプリンセス雅子、はバラの品種。

喧騒はここに届かず千鳥ケ淵戦没者墓苑の玉砂利を踏む　林　博子

この戦没者墓苑の所在が話題になった。靖国神社に比べて余り人がいっていないようだ。喧騒はここに届かず、にもそういったことはしれる。ウェッブでは花がいろいろ紹介されている。たまたま気付いてお参りすることになったという。歌には空気感が出ている。

火口より出でし蒸気の流れくる大涌谷に黒卵買う　市川茂子

大涌谷が丁寧に描写されている。定番の黒卵を買った。縁起ものでもある。数と賞味期限の関係で、卵漬けの状態となったことは、同時エッセイにみえる。近所の母娘と三人の旅だったという。足取りのわかる歌でもある。

常のごと上野の駅はわれを止む由一の「鮭」の目を見むと来し　中川禮子

上野の駅が誘うものは何だろう。公園口の歌が同時の歌。一つの楽しさだろうか。「鮭」の絵は東京藝大大学美術館にあって、高橋由一展が二〇一二年に催されている。「鮭」のその目を見むといったところが独自で、何かつよい思いがうかがわれる。

〈那須通信31〉

水やり

加藤文子

日も長くなり、春の気配の漂うこのごろ、チュンチュン小鳥のさえずる中で水やりをする。ゆっくりジョーロでできるのも、あとわずか。植物たちが本格的に活動をはじめたらこんなふうにはいかない。ジョーロでは間に合わなくなって、ホースも使うようになるだろう。

今日は気温も上昇。少し風も吹いて、空気も乾燥しているので殊更よく乾く。

くもってどんよりした空もようの日が続いたので、たくさん水やりするのは久々だ。

乾きはじめた鉢を捜して水がめと盆栽棚を何度も往復する。しだいにジョーロを抱える右手に疲れを覚え、掬い上げる水の重さも意識するようになる。体が鈍ってしまったのだろうか。

毎日毎日してきた水やりなのだが、どういうわけか今日は疲れたと思った。

ジョーロの中でタプタプ踊る水音を聞きながら盆栽棚をめぐっていたら、ふいに子供の頃の父の営む盆栽園の水やり風景が脳裏に浮かんだ。

家業が盆栽園だったので庭に設えた棚にはたくさんの盆栽が並んでいた。敷地も、盆栽の量も、大きさも私のとはくらべものにならない。

当時はホースで水やりするという手段もなかったので、庭のあちこちにコンクリート製の大きな水槽や水がめがいくつも置いてあった。

頻繁に乾く初夏から夏のあいだは、父や弟子たちは麦わら帽子にランニング姿で首から下げた手ぬぐいで汗をふきふき、ひたすら水をやっていた。

炎天下、なん杯もなん杯もジョーロで水を汲んでいた。

体を休めなければ続かないほど、消耗していたのだろう。昼の水やりを終えると仕事場の板の間でみんなで横になっていた。

今ではジョーロで間に合わなければホースを使うこともできる。どちらも選べるのはありがたいことだと改めて思った。

水やりする父の姿や、敷地いっぱいにひろがる盆栽の庭の様子が思い出されて、「水やりくらいでヘコタレルナヨ」と、喝を入れられたような気がするのだった。

〈薫風颯々6〉

(新)6787

神村ふじを

三十八年勤めた学校を離れてから、少しの間を置いて町の教育委員会の常勤の職に就いたので、時間に制約される昔の生活にまた戻ってしまった。朝も職員と同じように出勤しなければならないので、愉しみにしているNHKの朝の連ドラをゆっくり見ている時間がなくなってしまった。BSで朝七時三十分から放送していると教えられ、「べっぴんさん」から見始めた。視聴率二十パーセントを超えるだけあってなかなかの好内容であった。

今回の「ひよっこ」も大変愉しみにしていて、なぜかというと、「あまちゃん」以来の有村架純の隠れファンで、どこにでもいそうでいないところがとてもいいし、庶民的で美人過ぎないところがまたいい。娘にしたいくらいの乗りでいつも見ている。また、「ひよっこ」には型破りな叔父の小祝宗男役で、山辺町の電器店の息子、パンクバンド銀杏BOYZの峯田和伸も出ていて、何か不思議な親近感がある。

その「ひよっこ」の初回を見て驚いた。我が郷土を代表するバス会社山形交通のバスに、高校へ

*(新)等の表記…実際は漢字を○で囲んだもの。以下同様。

通学するという設定で、主人公「みね子」に扮した架純ちゃんが学友たちと乗っているではないか。しかもその山交のバスは古いボンネットタイプで、(新)6787と車体番号まで振ってある。

私はこのバスは、新庄から肘折温泉まで運行されていた、いすゞ製の四輪駆動車であると確信した。山交バスの車体番号にはきまりがあり、営業所の記号の後ろに算用数字が入れてあった。営業所の表記は、山形本社なら(山)、寒河江営業所なら(寒)というふうに入れてあり、あのバスは間違いなく新庄営業所のバスである。しかも四輪駆動のボンネットバス、雪深い肘折温泉行きである。

6787にも意味があって、一九六七（昭和四十二）年に登録した87番目のバスであることを示している。だから、みね子の父親（沢村一樹）が出稼ぎに行っているのは東京オリンピックの直前だから、一九六四（昭和三十九）年のことであり、三年ほどのズレがあるのだが、そんなズレは大したことではなく、このバスがドラマに登場しただけでもウルウルと来そうであった。

そのほかにも山交バスには車種ごとに愛称が決められており、車体の側面に表示されてあった。例えばあのいすゞのボンネットバスは、確か「ぎんれい」だったと思うし、同じボンネットバスでもトヨタ製は「さくら」、三菱ふそう製のロングボデー車は「はやま」だった。ほかに「ちょうかい」「こまくさ」など、県内の山々の名前や山形に縁のある草花の名前が充てられていた。山交バスは、赤とピンクと白で染め分けられていて、それぞれ「さくらんぼ」「桃」「雪」を表している山形らしいカラーであった。

中学校の修学旅行で東京に行った時、上野公園の近くだったような気がするが、山交バスに出会った時の感動といったらなかった。山交のカラーは遠目からでもよく分かる。引っ込み思案な東北人気質丸出しの中学坊主たちが、人目を憚らず遠くから手を振った。何か不思議な懐かしさと誇りめいたものをみんな感じ取っていたのだ。山形県人を意識した最初の瞬間だった。

私が山交バスにひときわ愛着があるのには訳がある。私は山形大学に通っていた学生時代、夜行バスの添乗員としてアルバイトをした。当時の労働基準法は女性の夜間乗務を禁じていたのだ。だからバスガールならぬバスボーイとして東京山形間を往復した。時に蔵王にスキー旅行に来る女子大生のお世話係として、時に出稼ぎから戻る帰省バスの添乗員として……。

途中の停車地の確認や予定時刻、乗車中の注意事項などをアナウンスしなければならない。女子大生の前ではやけに緊張し、訛らなくてもいいところも訛ってしまった。出稼ぎの帰省バスは最初から酒盛り状態。観光バスのガイドと勘違いされ、何か歌えだの何か芸をしろだの、今日のガイドは男で面白くないだの、散々な目に遭った。

あれは忘れもしない年明けの夜間の上京バス。今の高速都市間バスの走りともいうべきもので、正月やお盆の時期などの繁忙期に、各営業所からバスを集めて東京まで何十本と走らせていた。あの日はひどい吹雪で道路も圧雪状態。宮宿から寒河江、山形、上山で乗客を拾い、翌朝東京へ着く予定だった。

赤湯の鳥上坂は凍結状態でノロノロ運転。だいぶ時間をオーバーして日が変わる頃ようやく米沢に辿り着いた。米沢で最後の乗客を乗せ、栗子峠に差し掛かろうとしたとき、バッテリーがチャージしてしまい、エンジンがウンともスンとも動かない。運転手二人掛かりで何とか動かそうとするが、外は吹雪、道路は圧雪状態、次第にバスの中まで寒くなってしまった。乗客の視線と今後どうするのかという詰問は二十歳そこそこの学生にはきつかった。何とか謝り通して乗客に我慢してもらうしかなかった。

バスが動かなくなってからもう二時間以上が経過し、乗客の我慢も限界に来ていた。ようやく米沢営業所と連絡が取れたのが午前二時過ぎ、営業所から代替のバスが到着したのが三時を少し回った頃だった。

乗客に代替のバスに乗り換えてもらい、すぐさま出発。その後福島に入った頃に雪は止み、一路東京を目指した。遅れは順調に回復し、運転手や添乗員の苦労が見て分かったのだろう、誰ひとり文句を言う人もなく、感謝の言葉も受けて降車してもらった。事故の状況を分かりやすく、少しずつアナウンスしていたことが幸いしたのだとあとで運転手から聞いた。

帰りは空バスで翌日宮宿に戻った。勤務明けにケンちゃんと呼ばれていた運転手から、「ご苦労様、一杯どうだ」と声が掛かり、三人で苦労を分かち合った。少年の気配を漂わせた若年の大学生が成年としてひと皮剥けた瞬間だった。

ふるさと

河内愛子

（1）

町内の民生委員が、今年から男性に変った。その少し前から、私は週二回、町内の集会所の「百歳体操」に通っている。すすめられた時、「百歳まで生きようと思っていないから」と、憎まれ口をきいた。だが今は毎週、会場まで五分歩いて行く。歩けなくなったら、自分も猫も困るから。

民生委員さんは会場の外に立って、誰々さん御苦労さんと声をかける。としよりがまごついていると、すばやくスリッパを揃える。高齢者は気がつくと三十人を越した。

四月半ばにその人が訪ねてきた。一人暮らしのとしよりへの目配りも仕事の一部なんだろう。中肉中背のにこにこした人だ。ちょうど頂きものの羊かんがあり、外出の予定もなかったから、散らかっているリビングに、どうぞと言った。名前も家がどこかもまだ知らない人だけれど。白いシャツに紺のネクタイをきちんとしめていた。夫婦二人暮らしかな、孫達と一緒かな？　お茶をいれながら私は、日頃思っていることを尋ねた。

「先生をなさってたんですか」

彼はびっくりした顔になった。

「おれが先生だったわけ、ないべした」

言われてみれば、彼のしゃべり方は、先生のそれではない。普通のお勤めだったのかも。

集会所の黒板に、彼は毎週大きい読みやすい字で、連絡や注意事項を書いておく。見るたびに私は、うまいなあと感心し、昔の小学校の先生のチョークの板書を思い出す。

戦前の師範学校は、先生の卵達にもう一つの教育でいまいましい教育勅語をたたきこんだ。教師の板書は、つねに子供の手本となる正しい見栄えのするものでなければならなかった。思えばどの先生もお手本と同じかきっとした字を書いていた。もちろんこの民生委員Sさんは、戦後生まれにきまっている。それを話すと、しばらく考えて彼は言った。

「おれの字はほんとに下手なんだ。ただこのところ、九十歳以上の人が三人くるよな。おれのしゃべることが一つも聞こえないって言わってしまった。そんで連絡は、見える字で書くことにしたんだ」

「耳の遠いとしよりって、わりと眼は見えるよね。私もそっちの方だと思う」

「一回書いたら、うしろに行って見直すんだ。また全部書き直したりしてんのよ」

そこまで一生懸命の字だったんだ。そして、も一つびっくりすることを彼は言い出した。ずっと独身で七年前に九十歳でなくなった母親と二人で暮らしてきた。女のきょうだいはいるらしいが。

「お父さんがいなかったのね」
「いるにはいたが悪い親父でさー。おふくろはうんと苦労したんだ」
「働かない人だったのかな」
「それもある。おれも田舎で高校までは行ったが、新聞配達やら何やらで働いてばかりいたから、教室ではいつだって落ちこぼれていたんだっけ」
「ただ唄の大好きなおふくろで、年じゅう唄ってる人だった。貧乏だけどもおかげで、家は暗くなかった。おれも歌だけは得意でさー。音楽は小学校からずーっと〝5〟だったよ」
　彼はにっこりした。良い話だ。
「民生委員の任期は三年だから、二期やっと六年だ。そのあいだにおぼえたこと生かして貧しい子供をサポートする仕事、できっといいと思ってるとこでね。おれ貧乏はよく知ってっから」
「そうなんだー」
　母を見送ったあと、彼は少年時代からやりたくてもできなかったことを、とうとうし始めた。毎朝ＮＨＫの基礎英語を聞く、ヴォランティアに出かける、クラシックギターの教室にも通って七年目だ。もっともこの半年は練習し過ぎで肩をいためて休んでいる。でももうじき再開する。
「あれえ、Ｓさんギターやってるんだ」
「うん、音楽大好きだもの」

　いつの間にか友達みたいなやりとりになっていた。思いついて古いアップライトピアノの上におきっ放しの「日本抒情名曲集Ⅱ」を彼に渡した。この人はきっとカラオケや飲み会で歌ってきたにちがいない。本の中の二百曲の半分も私は知らないが、まあ「どれか歌ってみますか」ときいた。良い歌ばっかりだ、と感心していた彼は「見上げてごらん夜の星を」と言った。私にも聞きおぼえがある、演歌というより抒情歌なんだろう、伴奏も弾きやすい。七十歳相応に少しくたびれているけれど、驚いたことに、かなり良い声で音程も確かである。十年も前に調律しただけ、私も長年伴奏なんかしたこともないのだが。
「ピアノの音って、なんてすばらしいんだ」
　彼は感に堪えている。たぶん生まれてはじめてすぐ傍でピアノが鳴り、合わせて歌ったからだ。ギターの音は三オクターブだけなそうだ。ピアノは八十八鍵つまり十一オクターブ以上だから、それだけ表現も複雑で深くなるのかも。
「今度はギター持ってらっしゃい。合奏しよう。楽譜ないと私は弾けないけど」
　まるで偉そうに私は言った。彼は嬉しそうに帰って行った。

（2）

　五歳からほぼ十年、ピアノをけいこしたとひょっと話すと、事情を知らない人は、良いうちのお

嬢さんだったのかと意外な顔をする。とんでもない。そんなお嬢さんだったためしはない。

明治維新後、西洋音楽は二つの道筋で日本に入ってきた。一つは官（文部省）→東京音楽学校（現東京芸大）→血の汗を流して励んだ若者エリートのヨーロッパ留学。彼等が作ったメロディー中心の文部省唱歌。「花」「荒城の月」を作曲した瀧廉太郎は代表者の一人であろう。もう一方のそれはキリスト教会の和音が支える宗教音楽による学習だった。「からたちの花」「この道」「赤とんぼ」など数々の名曲を残した山田耕筰は牧師の息子であり、島崎藤村の詩「椰子の実」の作曲者大中寅二は、東京霊南坂教会のオルガニストだった。

当然のこととして幼い私にピアノを習わせた父もプロテスタントの牧師だった。父母の夢は娘が礼拝堂でオルガンを弾く姿にあったかもしれない。たしかに昭和十年代のピアノ友達はみな信者の家庭の子弟だった。ピアノは好きでも嫌いでもなく、特にうまい子供でもなかったけれど、私は毎週レッスンに通った。だが、親の夢は永遠に果たされなかった。

女学校三年生、十四歳、敗戦直前の一九四五年七月、アメリカによる都市の無差別爆撃で、父の教会堂も家族の住居も一晩で燃え落ち、父も母も焼け死んだ。

一人生き残った一文無しの私を、伯母（母の姉）が養ってくれることになった。伯母は私の女学校の音楽教師で、幼い私にピアノの手ほどきもしてくれた人である。彼女が住んでいた借家の家主

一家も焼け出され、立ち退きを求められたところだった。仙台市の半分以上が焼き払われたさなか引越す先などありはしない。五部屋の一軒家を家主の六人家族と伯母と私が分け合って暮らすことになった。

明日の食べ物を求めて焼け残った仙台駅に人々は殺到した。勤めが終ると伯母もそこにまじった。給料だけでは二人の暮らしをまかない切れなくて、伯母は夜は出げいこ、土・日・祭日は一日じゅう子供達にピアノを教えていた。幼い時から私のピアノの先生だった伯母は、今やその姪を養うためにピアノを見てくれる時間をなくしてしまった。学校勤め、食料探し、ピアノレッスンに明け暮れる伯母に私はろくに感謝もせず、また三度の馴れない炊事の日々をみじめとも思わぬ少女だった。

平和をとり戻した学校で、外国民謡や讃美歌を合唱する友達から離れ、伴奏の椅子に座るのは晴れがましく嬉しかった。全国の戦災孤児の中では、もっとも恵まれた少女の一人であったのはたしかである。

伯母はやさしい人だった。大学生になった私が男友達を連れてきたり、夜おそくまで歩き回ったりするようになるまで、叱られたり小言を言われたりした記憶はない。少女のつくる粗末な料理をいつもおいしいとにこにこ食べてくれた。疲れてもいただろう。

だが十代はいつまでも続きはしない。他にしたいこと、することが山ほどふえてくる。図体の大

きい楽器とのつきあいは徐々に薄れ、大学を卒えて仙台を離れた後は完全に切れた。恐るべきことに、断絶は八十歳を越すまで続く。えらんだ人生の成り行きだった。

私が結婚した大正生まれの夫はクラシック音楽をとても愛した人で、若い時はとりわけバッハに傾倒していた。子供三人が育つ時、家の中は大てい父親の聴くＬＰの音楽が流れていた。音大に入りはしなかったが、三人はきわめて自然にピアノを弾きはじめ、音楽になじんだ。一方の私は自分のしたいことを最優先し、大して子供をかまわない母親だった。時がきて三人は家を出て行った。いっそう私は自由になった。

二〇〇一年に夫がなくなった。そして二〇一三年初夏の朝、病気で十年間母親と猫と暮らし、ようやく快方に向かっていた長女が、急逝した。好き勝手な母親だったにせよ、夫と娘の不在は生きている実感を根こそぎうばった。何も食べられない。眠るには大量の眠剤が要る。

葬送のあと、その夫とヨーロッパ西南の街に戻った、長女より十一歳若い次女は、空港で安着を知らせた後に言った。

「ママ、あなたは良いお母さんだったのよ」

そうは思わないけれど、あの時の娘の言葉を、幾度となく私は思った。

東京に住む息子とつれあいは、母親を案じて蒼白だった。これではとても生きることを止めるわけには行かない。

とつぜん六十年も音信不通だった女学校時代の本好き同士の親友から電話をもらった。彼女は敗戦の年の春、父親をなくし、女学校だけで就職した。珍しく鋭い眼をした美少女だった。焼け野原の時代にどこで見つけたのだったかドストエフスキーを回し読みし、『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』に登場する女性四人の誰が一番？　などとおしゃべりしたことを、どっちもすぐさま思い出した。文通と電話のやりとりが始まった。彼女は八歳若い男性と昔結婚し、彼の水産系の仕事のためスペインのカナリア島に十年住み、七つの海をめぐり、優秀な息子が二人いる。三年前に夫をなくした。ある時、私はぼやいた。「私って家の中のこと何もできないでしょ。不器用は救いがない」。即座に彼女は言った。

「あなたピアノ弾けるじゃない。それで十分よ。今だってあなたの指の動き、おぼえてるもの」

頭をたたかれたようだった。本人が忘れてることを、おぼえてた人がいるなんて。

不意に私はかつてのモーツァルトやシューベルト、ベートーヴェンを聴きたいと思った。あと四年か五年後にはたぶん生きていない自分。楽譜が見えて、指が動いて歩ける時間はさらに少ないかも。ピアノが哀しみや悔恨を癒やすとは全く思わない。幼い長女を十分可愛がりもせず、苦しむ病気の娘を結局助けられなかった自分は癒やされたくもない。ただ「死と乙女」も「悲愴ソナタ」も

モーツァルトの「ロンド」も哀しみの曲だった。大作曲家達なのにどうしてあんなに悲しい歌ばかり書いたのだろう。

おととしの秋だから一年半前だ。息子達はとても喜んで、物を置くだけになっていたアップライトから固定電話やぼろぼろの楽譜や本をどけ、埃を払った。

「いいことだよ、頭も全身も使うから」

と彼は言った。親は呆けないでもらいたいものね。

以来、私に余分の時間はなくなった。長女が散らかしたままの楽譜の中にはフォーレもドビュッシーもあるが、ショパンが五冊と多い。もちろん好きだったのだろう。中からせっせと選んだやさしいマズルカ三つとプレリュード三つ、シューベルトの即興曲を練習した。難しい曲は一ページで諦める。目下は戦乱の最後のころ弾いた悲愴ソナタを始めた。十四歳の自分と八十六歳の自分は別人みたいなものだけれども、初めての曲よりはましである。

（3）

五月連休の直前、息子とつれあいの友子ちゃんが帰ってきた。勤めが終った金曜の新幹線だから、着くのは九時過ぎ。翌朝はいつも通り友子ちゃんがコーヒー、ベーコンエッグ、サラダ、トーストを並べてくれる。レストランのランチより、はるかにおいしい。さつき晴れで空はどこまでも

青く、庭の二ヵ所で夫の育てた紅いつつじが、燃えたっている。花をおくほか何もしないけれど、長女の命日が近い。あと片付けも友子ちゃんがするから、手すきの私はさっさとピアノの前に腰かける。悲愴ソナタ第三楽章の練習。ベートーヴェンの二十八歳の作曲とのこと。

戦乱時の最後、ピアノが灰になる数日前、これをさらっていた。古典派の端正はあるとしても、烈しい悲しみは伝わってくる。当時もベートーヴェンのピアニストとしてのウィーンでの名声は高かった。身体も丈夫で耳もよく聞こえていたはずである。それでも悲しく孤独だった。なんでかしらん。人の世にはいつでもどこでも悲しい人は山ほどいるのだろう。

隣の部屋で猫と遊んでいた息子が散歩か買い物に出て行くところだ。傍を通りながら声をかけてきた。

「〝ミ〟は黒鍵ですよ」

「そうそう」

もう私の眼は記号がシャープかフラットか、音符が三線目の上か四線目の上か識別できない。だから適当に弾く。へんな音と思った瞬間、曲は次に進んでるから、そのまま進む。たしかに、黒鍵でした。

「河内（こうち）さーん」

息子と入れ代りに声がした。Sさんが約束通りギターの譜面の拡大コピーを三枚持って、立って

いた。六月の第一金曜にギターを持ってくることになった。
「頑張って練習してくっからね」
一枚目は「禁じられた遊び」、ギターだと「ロマンス」と言うらしい。二枚目、三枚目を見てぎょっとした。聴いたこともない「演歌」である。そもそも演歌というものを聴いたことがない。関心がなかった。機会も年に一度の町内敬老会を除いては。友子ちゃんを呼ぶ。彼女の父は演歌大好きと聞いたことがある。たぶんわかるだろう。譜面を見るだけの演歌のリズムは難しい。
「津軽のふるさと」は美空ひばりの唄。「潮来花嫁さん」は花村菊江。ちょっと待ってねと言って、友子ちゃんはスマホをとってきた。彼女も唄えないんだ。ちょっとさわるとステージで「津軽のふるさと」を唄う美空ひばりが、続いて「潮来花嫁さん」を唄う着物の花村菊江という子がパッと現れた。呆れて私はすごいっと言っただけで声も出ない。なるほどこれでは世の中の人は知らないことなんか一つもなくなるはず。それを知らないでいる自分一人が恐ろしくこっけいだった。
Sさんが音楽大好きと言った時、私はそれを自分の好きな音楽と同じものと何となく思ったふしがある。でも、音楽の一語には演歌もジャズもビートルズもみな含まれていたのだ。言葉って海みたい！
一方Sさんは、大好きな「津軽のふるさと」イコール美空ひばりの持ち唄や「潮来花嫁さん」な

ら私が知っていると思い込んだのかも。おかしい。私だけがおかしがってるんだけれど。
「音楽にあるいは美空ひばりの唄に母と自分は支えられて生きてきた」とのSさんの言葉には真実があった。ほんの少し手伝いができるのは悪くない。
しょっちゅうまちがえながら、あの日以来、一日三十分、私は三つの唄を練習する。まちがいは減ってきた。ただ「演歌」「美空ひばり」のどこが良いのか面白いのか、さっぱりわからない。いろいろ聴けばちがってくるかもしれないけど。
「山形も暑いんでしょう。熱中症に気をつけて」
友ちゃんから電話がきた。
「演歌とベートーヴェン、ごちゃごちゃの毎日よ」と話すと、
「お母さん、ひとまわり大きくなるんじゃない」
彼女は笑った。私も笑った。Sさんのふるさと、私のふるさと、人にはそれぞれちがうふるさとがある。ない人もいる。
ふるさとを語るのは容易ではない。

対詠　ごきげんいかが？　PART 62〈2017〉

O　小野澤繁雄
N　布宮　慈子
K　河村　郁子

震災から六年を過ぐ　アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』読みたり　3月13日　N

白木蓮の咲き初むるころ思ひ出づ六年前の新宿流民（るみん）　3月14日　K

列（つら）なってどこまでのみち制服は競輪学校の生徒ら近く　3月20日　O

忖度（そんたく）といふ字を知りぬ国会の籠池さんの証人喚問　3月23日　N

OED*に「ポスト真実」載るといふ情報の真偽がカオスの時代　3月25日　K

*オックスフォード英語辞典

裏通りはさらにもさびしさながらに民家こんにゃく工場がある　3月30日　O

どの地にも玉こんにやくがあるものと思ひ育ちぬ祭りの玉こん　4月5日　N

江戸前の穴子の天ぷら塩ふりてパリッと食（たう）ぶ　土地の慣はし　4月8日　K

酢漬けもあるとわが生まれ県渋川に苺品種の「弥生姫」みる　4月11日　O

菜の花が置賜（おきたま）の地に揺れをれば吉里吉里忌なり逝きて七年　4月16日　N

三分一湧水館にそばを食む流水分かつ三角石柱　4月18日　K

堤が桜堤に、公園になりし由来も人の関わり　4月19日　O

武蔵野市桜堤に保育園、小中学校を過ごしたる子ぞ　4月23日　N

よみがへる原風景のさくら桜ちちはは姉と歩みし上野　4月27日　K

平日の牡丹園内藤の下車いすの人多くがやすむ　4月30日　O

二十度を超す陽気なり桜桃のすなはち白き花は満開　5月5日　N

ひとところを占めて群れ咲く蝦根草父の植ゑしは五十年前なる　5月10日　K

冬の間は枯れたようなに辛抱がいると庭の人鉄線の花　5月11日　O

鉄線が花芽つけしといふ母のよろこびの声つつましきかな　5月21日　N

亡き父の賞でしは鉄線こむらさきいつしら庭に見あたらずなり　5月23日　K

草刈るというほどの荒草ののび母とこし墓そのままに母

5月25日　O

草刈りてマルチにすれば肥やしとて畑の草を無駄なく使ふ

5月31日　N

外構のリフォームに生(あ)れし一隅を坪庭と成し隣人招く

6月2日　K

落ちている花片ひとつもないことに土木事務所は泰山木の花

6月6日　O

いつぽんの泰山木あり白花を山の道より見上ぐはつなつ

6月12日　N

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

●同じ年に生を受けたる縁（えにし）にてかたみに歌を詠みて読みあふ　結城　文

同じ号、河村さんの短信に、昭和九年生まれの歌人の会の集まりで、昨年晩秋の頃、奥津軽に出かけたことが出ている。これに、作者も参加しているようだ。一連タイトルも「津軽野をゆく」。もう一首と合わせて、会の紹介が成されている。

古希の年の発足をして十年余そのうち三人（みたり）はすでに世になし

晩秋ということもあるが、挨拶に終わっていない、深々としたものがある。土地柄に触れているところ、二首を挙げる。まずはみることをしている。

津軽野はまことに広し刈田の上ただべうべうと風のゆくなり

赤き葉はあくまで赤く黄なる葉はあくまで黄なり津軽の里山

●木枯しの吹く音やめば静けさに仕舞仕度の思いめぐらす　市川茂子

年末から年始にかけての歌で、タイトルは「寒気」。これは年末の歌。風がやんで、しずかになったところで、こんどは、思いをめぐらすことになる。それも仕舞（終い）支度の思いなのだ。その前には、何か言葉が、方言が出てこないなと、さらには、年を重ねているのに標準語にも訛りが混じっているようだ、と。何か振り返るばかりの思いがある。そんな日々でも、年始で気分が変わるようなところがある。

酉年の幸先の良き思いなり晴天続き大寒に入る

●弥十郎より水の不足を聞きたれば鬼は一夜に逆堰作りき　河村郁子

流れ変へ田を潤して崇められ地名は鬼神堰と鬼沢

タイトル「津軽伝説（Ｉ）鬼神伝説」の、その核心のところか。農夫の弥十郎に睦んでいた山の大人（おほひと）＝鬼ということが、その前段にある。鬼神（き）社は岩木山の麓、阿曽部（アソベ）の森にあるという。くだんの旅で、津軽の伝説に興味を持ったらしい。日本人本来の心の幹細胞が残っている、とこれも同じ短信に作者は書いている。こんな歌が、結論の部分か。

今もなほこの地のならはし節分に豆を蒔かぬと守られてゐる

●十代に思はざりしを石（いそ）の上（かみ）ふるさとの山われにやさしも　布宮慈子

石上（いそのかみ）は、ふる、にかかる枕詞。歌は離郷者の思いのようだが、作者は、また帰郷者でもある。一連タイトルは「雪」。冬にとりわけ故郷を感じる土地柄なのだ。次の歌で葉山は月山の東に位置する山らしい。その次の歌の雪の種類の多さ、とくに忘れ雪（終雪（しゅうせつ）、に同じ）、には何かあとをひくものがある。

薄雪の疎林を右にカーブしてゆけば見えくる月山、葉山

俄雪（にはか）、粉雪、根雪、牡丹（ぼたん）雪、綿雪、粗目（ざらめ）雪、忘れ雪

前号作品短評B〈慈子〉

●三ツ辻に傾いてある石仏凭れてひとつ牛乳瓶がある　小野澤繁雄

三ツ辻は三叉路のことだろう。田んぼ道がそのまま現在の道路になったような交差点。そこにある石仏は傾いていて、花を挿すための牛乳瓶がもたれるように置いてある。懐かしい風景にホッとしながらも、三ツ辻・傾く・凭れるの語句からは時代を遡り、また異界へ通じるようなほの暗さを感じてしまう。次の歌は車から見ている場面か、よく子どもを観察している作者である。

信号が青になりそう三人の中学生が突っ込んでくる

●「冬景色」口ついて出る小六月　谷垣滿壽子

「小六月」とは陰暦十月のことで、小春。ほぼ十一月にあたるという。冬になってからよりも、冬になりかけのころの寒さがこたえるようだ。冬景色だなあ、と思わず言ってしまった自分に驚く。実感がこもっている。東京には富士のつく地名が多い。いまよりもよく見えたのだろう。

むかし富士みえし小径や冬晴るる

●好きなのは金柑・名誉なきディラン　新野祐子

昨年十月、歌手として初めてノーベル文学賞に決まったボブ・ディラン。発表後しばらく沈黙していたから、賞を受けるのかどうか話題になった。「反骨のミュージシャン」「時代の代弁者」等のイメージがある彼は、十二月の授賞式には「先約があるため」欠席したものの、今年四月メダルと証書を受け取っている。秋の季語であるキンカンとディラン、なかなか面白い組み合わせではないか。いわれてみれば、という次の一句。「平等」の意味を改めて考えさせられる。

平等に解けてゆくなり雪達磨

●床に落ちしゼムクリップ雫のごとしよと短歌に詠みたる女思ひ出づ　丸山弘子

調べてみると「ゼムクリップのゼムって、何？」というのが出てきた。たしかに知らない。イギリスで一八九〇年ごろにゼム・マニュファクチュアリング・カンパニーが発明したというのが通説で、そのゼム社のゼムが「ゼムクリップ」となったらしい。掲出歌は、うたった女性を思い出すというのだが、たとえに意外性があってその歌を読んでみたくなる。次は躍動感のある一首。

われに気づき犬は一瞬止りしが主人を追ひて朝を駆けゆく

エッセイ教室「清紫会」の作品より

みていないこと

小野澤繁雄

眼の前にあっても、みていないということはある。

子どもの頃、水屋や流しは裏庭につながっていたから通路でもあって、手足を汚してもどってきたときなど、水屋の屋根の下井戸端で洗って、そのまま流しから上がっていた。

しもやけがひどかった頃は、洗面器に張ったお湯に手をひたしてもんでもらうようなことをしたのも水屋だった。

餡(あん)こづくりを手つだったり、せいろでお焼きを焼くようなこともした。遊びの感じもしていたようだ。

それでも、母のすることをしっかりとはみていなかったようだ。

後年になって、今のEテレの料理番組で、根菜類は水から茹でること、土のなかでできるものは水から、というのを聞いて、あれそうだったっけ、と思うことがあった。

さつま芋をふかすときなど、水からでよかったかなと迷う。とうもろこしでもなやむ（こちらはお湯からだが）。そんなことのあとのことだ。

今の団地の家は真ん中に風呂や洗面所、やトイレがあって、窓に面していないぶん、とくに風呂、トイレはかびやすい。換気扇もあるが、十分にはふせげない。

あるとき気付いて、ドアを少し開けておくようにしたところ、湿気が残らず、いいようだった。

それでも、すでにすぎてしまった時間がある。このことを、主婦でもある同僚に云ったら、その人は新築の（家の）最初からそうしていると云う。

図書館員の仕事がながく、前半では、カードを繰るようなことが多かったから、指先の腹はいつの間にかつるつるになっていた。そんなことで、紙を捲るのが苦手だ。新札でなくてもうまく数えられず、レジで余計に出してしまったこともある。

スーパーでは、ビニール袋の口があけられず、これはやっとさいきんになって袋詰めのコーナーにあるテープを少し指にとって使うようにしてみた。これはいい、と思ったので、これもあるとき口にしたら、湿った布巾が置いてあるでしょ、と言われた。たしかに折りたたんだものが置いてある。みていなかったのだ。

落書き

松井淑子

うちの真向かいの駐車場は通りより大人の背丈ぐらい高くなっており、通りに面したその法面（のりめん）はコンクリートの壁に覆われている。

先日の朝ベランダのカーテンを開けたら、この壁面に、以前から小さなものはいくつかあったが、壁の三分の一を占めるぐらいの大きな落書きがあるのに気がついた。前の晩カーテンを閉めたときにはなかったから、夜の間に、街灯の明かりのもとで描かれたのはたしかである。〝24K〟という文字が立体的に、陰影までつけて描かれている。24キロの意味なのか、もっと別な意味があるのか、そのへんは不明である。

しばらく前から、くずし字のアルファベットなどを組み合わせたような、意味不明の大きな落書きを、あちらこちらで見かけるようになった。どういう人たちが描いているのかよく判らない。

大分以前、週刊誌か何かで、外国のどこかの街（もしかしたらニューヨークだったかもしれない）の地下鉄のホームの壁にたくさんの落書きが描かれているという記事を読んだ覚えがある。そういう外国の風景を日本にも移植したくて描いている若い人たちの姿がふと想像された。

落書きは日本にも昔からある。そのおもなものは〝へのへのもへじ〟といった平仮名を組み合わせて人の顔にしたものや、相合傘の下に男女の名前を並べたものなどで、それが裏路地のしもた屋の板塀などに小さく描かれていた。子供のころの私も近所の遊び仲間たちと、これはさすがによその家の板塀ではないが、地面に蠟石（ろうせき）で〝へのへのもへじ〟などを描いて遊んだものである。

その地面がなくなり板塀もなくなった。さまざまなものが変わってゆくなかで、落書きが横文字ふうの意味の判らないものになってゆくのも、あたりまえのことかもしれない。

鮪ののり巻

市川茂子

急ぎの用事を終えて、帰って来た夕方から、気温が下がり強い風が出てきたので、このまま布団に入って寝てしまいたくなった。

今晩の食事は何にしようか、スーパーに寄る時間がなかったので、冷蔵庫にあるものですませようと考えているところに、待っていたかのようなタイミングで、近所の奥様が、夕食に鮪ののり巻を作ったからと言って、寒い風に吹かれながら持って来てくれた。

お腹がすいていたので、思わず手を出して飛び上がるほど喜んだ。私にとっては、こんな時が、グッドタイミングになる。

奥様はときどきに煮物や、まぜご飯、赤飯、野菜の料理など、私のために用意している器のパックではないかと思うほど、丁度いい量のごちそうを持ってきてくれる。ほかの方にも差し上げているようだ。来たときはいつも、体調のことや、何か困っていることがないかと、気遣ってくれる。

自宅では九十歳を過ぎたお母さんの介護をしながら、近くに住んでいる年配の方々を励ましたり、アドバイスするなど、忙しい日々のようだ。その中に一人暮しの私もいる。奥様が自由に出歩くことが出来るのも、理解あるご主人に守られているからだと思う。

またお母さんは、お芝居や唄が好きなのでよく連れて行ったと聞いたことがある。お母さんは氷川きよしのファンで、近年は歩くことがおぼつかなくなって来たので、氷川きよしの公演だけには連れて行くようにしていると言う。

自宅からもっとも近い所が中野サンプラザなので、会場に行ってから車椅子を借りて、別通路から入れてもらうそうだ。私も芝居やコンサートに他の方と一緒に行こうと誘われて連れて行ってもらったが、今はなるべく迷惑をかけないようにと思って、一人で行くことにしている。

まわりには色々と心配してくれる方々がいて、心強いのだが、年寄りに免じてと甘えないように心がけている。が、出来ないことは、素直に助けてもらうことにする。後で大ごとになったら、かえって迷惑をかけることになってしまう。

鮪の中落ちから取れたと思われる、とろのたっぷり入ったのり巻を食べて、親切にして下さる奥様に、ごちそうさまと言いながら、今夜はゆっくり眠れそうだ。

「清紫会」だより

◆第152回　平成二十九年二月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・鮪ののり巻／小野澤繁雄・昔ながらの／松井淑子・仕掛け人は誰か

◆第153回　三月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉小野澤繁雄・みていないこと／林博子・ひかりの春

◆第154回　四月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階C会議室
〈提出作品〉市川茂子・黒たまご漬け／小野澤繁雄・インソール／林博子・千鳥ヶ淵／松井淑子・落書き

無二の会短信

◆三月十日、三男の弟が日赤病院に救急搬送される途中に電話があった。脳梗塞らしいとのこと。妻を亡くしていて、二人の息子達は離れていて独り暮しで心配なので、すぐに駆け付けた。早く処置出来たので重症にならないだろうと聞いて少し安心したが、リハビリが長く続くのではと覚悟をする。四月末になって、老人会の会長を引き受けていてくれたT氏が胃癌で入院の知らせがあり、副会長にもどったのに、また多忙な仕事となり、短歌に向き合う時間が少なくなった。それでなくても、作歌の完成が早いほうではないので、悩みの種ではある。　池田桂一

◆晴天の穏やかな昼過ぎ、急に風が出てぽつぽつと雨粒が飛んで来た。傘をもたずに出たが、日照り雨だからすぐ止みそうだ。反対側を見たら、ビルとビルにかけ橋のように虹が架かっている。七色がはっきりわかるような、うす紫色があざやかに見える。絵本にでている虹や、遠い日の自然で見た思い出ぐらいで、こんなに近くで見ることがなかったので、郷愁を感じる一瞬だった。　市川茂子

◆定年後、非常勤の二年を経過した後で一年が経過した。父が亡くなった年齢（六十八歳）になっている。やっと属性で無職とする（ブックオフに本を持ち込んでも、チェック欄がある）にも慣れたようだ。無職には違いないのだった。全体に時間があるようなところ、それでも用のあるような日程がすぐくるよ

うなのが不思議だ。

小野澤繁雄

◆家の小さな庭の福寿草が開花した。若干の早い遅いはあるものの、相談したかのように咲き始めるのにはびっくりさせられる。福寿草は土を嫌うらしく、移植して増やそうとすると失せてしまうことがよくあるらしい。どこからか持って来て移植しようなどと考えないで、咲いてある場所に出向いてゆっくり鑑賞するのがいい鑑賞方法のようである。

神村ふじを

◆四月十二日、前日の雨と雪とは真逆の晴天に恵まれ、あずさ号で北杜市に向かった。中央本線の小淵沢駅の一つ手前の無人駅の長坂で、迎えの車に乗り、熱那（あつな）神社に着いた。ここには昭和九年生まれの歌人の会の同輩の歌碑があり、建立から十年目の顕彰会が行われた。神道に則り厳かな式次に執り行われた。式が終わって周囲を見渡すと、右には八ケ岳連峰、左には南アルプス連峰、一際美しく甲斐駒ケ岳が聳えている。山女だった私には望外の賜物であった。

河村郁子

◆待ちに待った春がやってきました。なんとなく胸ふくらむ季節となり、毎日嬉しく思ってすごしております。高齢となり、そろそろ終活を始めなければと思っております。

谷垣滿壽子

◆今年二月下旬に、日本自然保護協会から山形県自然保護団体協議会に書類が届いた。私の住む西置賜郡は飯豊町の民有林六百ヘクタールに、東京の会社が大規模太陽光発電所を造る計画がある、という内容だった。この情報は、環境エネルギー政策研究所所長の飯田哲也さんからのものという。私はびっくりして、すぐに山形新聞長井支社に取材の依頼をした。

山形新聞は、聞いたこともないし余りに規模が大きいので半信半疑だったが、飯豊町や実施主体に問い合わせて、三月十五日掲載した。町も県も反対している。水源涵養保安林、土砂流出防備保安林を破壊して大都市への電力を作るのは許せない。自然エネルギーには良いものと悪いものがある、と飯田さんも言っている。

新野祐子

◆二十数年振りに日光に出かけた。今年は東照宮の陽明門の修復が完了したとあって、そのせいか観光客が格別に多いようだ。しかも大部分は外国人で、欧米人ばかりではない。日本人かと思っていると、中国語や韓国語らしき言葉も聞こえてくる。それに対応するために、東照宮の神職らしき人も売店の人も英語。市内のバスの中の説明文やアナウンスは英語、中国語、韓国語。外国人観光客がふえているとは聞いていたが、これほどとは思わなかった。

松井淑子

◆病院へ行った帰り道、いろいろ花を育てている角の家の女性に、「いつもお花がきれいですね」「ありがとう」。顔はお互いに見知ってはいるが、言葉をかわしたことはなかった。そう言って通りすぎたが、すぐ呼びとめられた。「これどうぞ」。育てているミニバラを一枝下さるという。「どうして？」「褒められたから嬉しくて」。こちらも思いがけないことで嬉しくなった。早速、花びんに挿して喜んでいる。思いがけないことはもう一つ。咲いている花の後から蕾が三つものぞいていて、しばらく楽しめそうだ。

丸山弘子

◆札幌での生活が始まり、少しずついろいろなことが順調にまわり始めた。ただひとつ、物足りないのは苫小牧の空や景色を見ることができなくなったこと。同じ北海道でも都会と田舎の違いだろうか。苫小牧を車で走っていると、地球の美しさをごく自然に感じることができた。それは天候によらず、ほぼ毎日。私は車の中で感嘆の声をあげていた。心の動きがやや鈍くなってしまったのは、少し残念なこと。

山内裕子

◆この連休を利用して、三十何年かぶりに奈良から室生寺をめぐってきた。ちょうど花の季節で、長谷寺の牡丹、室生寺の石楠花が見ごろであった。奈良の古き仏たちにも会え、道々古代史が立ち返ってくる思いがした。この時期の旅行はむしろ避けていたのだが、思ったほどの混雑はなく、けむるような若葉に濯がれる思いの旅であった。

結城　文

◆バラの季節がきた。ひろ子バラも咲いた。丈一メートル、深紅。大輪ではない。原産と聞いているから「わらべが見た野なかのバラ」が先祖かもしれない。数えてみたら花の数は七十以上あった。

十年前、仙台の若い友達・博子から、大きいダンボール箱が届いた。既に花の終った二十センチのバラの枝が五本出てきた。

二十代の博子は、アムネスティで死刑廃止運動をけん命にしていた。当時は勤めのかたわら路上生活の人たちの支援を一心に続けている。言葉はきびしいけれど、実はやさしい彼女を私は好きであった。趣味と言えるかどうかわからないが、あと一つ彼女の好きなことは原産のバラを育てること。万事に大ざっぱな私にもバラを育てる喜びをわかってもらおうとしたにちがいない。きっとうまく行かないよと思いながら、私は鉢に土を入れ小枝五本を刺した。その頃、私は病気の長女と二人で暮らしていた。友達三人と十日間シルクロードへの旅がきまった時、私は娘にくりかえした。わざわざ博子さんが送ってくれたバラに水やりを忘れないでよ。バラは生きながらえた。娘の好きな花はバラではなく、ひな菊やすみれのようなか細い花だったけれど。

二〇一一年冬、博子さん六十歳、二年後初夏、長女五十二歳でどっちも急逝した。最後まで一ついのちのように仲良く、姓だけ共にしなかった博子さんのつれあいから、アパートの窓下のせまい地面で、彼女が二百種の原産バラを育てていたことを聞いた。もらったバラの鉢を軒下に放り出したまま、私はそれを忘れた。ある日、草むしりをたのんだ若者が、息たえだえながら生きていた二つのバラを庭の地面におろしてくれた。ひろ子バラはぐんぐん育って翌年、蕾をつけた。花の中に博子さんと長女がいるとは思えない。でもバラの今日のいのちを支えてくれたのは娘と博子さんだ。毎朝花に会うたびに二人を思う。

河内愛子

編集後記

◆春や桜についての原稿がそろうと、やはりうれしいものである。桜に特別な思いをもっていたわけではない。が、雪国に戻ってきて五年もたつと、春がきて花が咲いたり虫が飛ぶこと自体が素晴らしいと思うようになった。梅も桜も沈丁花も同時に見られる！　春は、なにか体の奥深くから力が湧いてくるような感じだ。短歌（和歌）や俳句に詠まれた桜はごまんとあるが、一つずつあげてみる。「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（紀友則）、「両の手に桃とさくらや草の餅」（松尾芭蕉）。

◆キリバス共和国のケンタロ・オノさんのお話を聞く機会があった（主催・河北町環境を考える会）。二月半ば、山形は雪がどっと降ったばかりだった。仙台から来たオノさんは「県境を越えると、こんなに雪があるんだ」とびっくりしている。奥羽山脈、おそるべし。たしかに、公民館の玄関でお会いしたオノさんの出で立ちはスーツに革靴。雪道ではすってんころりんと転んでしまうような靴だった。

ケンタロ・オノさんは一九七七年、宮城県仙台市生まれ。九三年、十五歳でキリバスに行く。きっかけは「兼高かおる世界の旅」を見て南の島に憧れたからだという。その後、同国に住み、家族もできて、二〇〇〇年にキリバス共和国に帰化。一一年の大震災後、生まれ故郷の仙台に拠点を移し、活動している。一五年、キリバス共和国名誉領事となる。

太平洋に浮かぶ大小いくつもの島からなる赤道直下の国、キリバス共和国。海抜の低いサンゴの環礁が多く、近年の海面上昇により、国土の半数以上が水没の危機にあるといわれている。オノさんが見せてくれた美しい海岸線とヤシの木の風景は過去のものになりつつあるようだ。赤道性気候という本来は安定した気候のはずなのに、最近は気象が極端になり、雨水の減少や魚が捕れなくなる、海岸線の浸食など、生活がおびやかされるほどの変化が起きている。水没というとツバルは話題になるが、キリバスはそれほど知られていない。「地球温暖化」「気候変動」ということばは、しばしば政治的に利用されることもあった。こうすればよいと簡単にいうことはできないが、ゆっくりもしていられない。実際にキリバスは、これまでにないほど大潮や高潮の被害を受けている。キリバスの現状を知った以上、ひとに伝え、みんなで考えていくしかない。

八月には、公民館より広い会場、河北町の「サハトベに花」において、ケンタロ・オノさんの講演会が予定されているそうだ。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 86号
二〇一七年六月二十三日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright © 2017 MUNINOKAI. All rights reserved.